



Data	2025-63
監督・脚本: アーロン・シンバーク	
出演: セバスチャン・スタン / レナ	
ーテ・レインスヴェ / アダ	
ム・ピアソン	

## 👁️👁️ みどころ

「ルッキズム」をテーマにしたデミ・ムーア主演の『サブスタンス』(24 年)は後半の“阿鼻叫喚ぶり”が怖かったが、本作のチラシに映る“顔に極端な変形を持つ男”もかなり怖い。彼は俳優志願だが、こんな顔での俳優デビューが可能なの？日本でも韓国でも若手俳優は美男美女ばかりだが・・・。

劇作家を目指す若い女性が隣の部屋に引っ越してきたところから始まる物語はありえない展開の連続だが、それがメチャ面白い。一方、「顔を捨てる」ことは不可能だが、命がけのサブスタンス（再生医療）によって美しい顔を手に入れることに成功すると、“美女と野獣”の関係は・・・？

本作の面白さの真骨頂はそこから！変身に成功した主人公は有頂天だが、アレレ、アレレ、新たにもう 1 人の野獣（＝顔に極端な変形を持った男）が登場してくると・・・？

本来の自分はどっち？なぜそんな疑問が生まれるの？鑑賞後はパンフレットに収録されている 3 本のクソ難しい「Column」を読みながら、そんな根源的な問題点をしっかり考えたい。

## ■□■テーマはルッキズム！『サブスタンス』以上にこりゃ必見！■□■

私が 5/17 に観た、「かわいいが暴走して、阿鼻叫喚」を謳い文句にした、デミ・ムーア主演の『サブスタンス』(24 年) (『シネマ 58』) は“ルッキズム”をテーマにした映画で、2024 年アカデミー賞メイクアップ&ヘアスタイリング賞を受賞！その“阿鼻叫喚ぶり”は気味が悪かったから、同じく“ルッキズム”をテーマにした本作は、チラシに写る主人公の姿（顔）を見ただけで、鑑賞拒否！

一瞬そう思ったが、チラシに映る、第 97 回アカデミー賞メイクアップ&ヘアスタイリン

グ賞ノミネートのほか、「A24 が放つ衝撃の異色作。理想と現実が反転する世にも奇妙な不条理劇」の文字を見ると、こりゃ必見！

## ■□■主演は“トランプ役”を演じたセバスチャン・スタン！■□■

本作の原題は『A DIFFERENT MAN』、邦題は『顔を捨てた男』だが、その意味は？チランには、同じシャツとズボン姿で椅子に座る 2 人の男が写っている。右の男はハンサムだが、左の男の顔は超異常！これは一体ナニ？そして、その上には「A24 が放つ衝撃の異色作。理想と現実が反転する世にも奇妙な不条理劇」の文字が躍っている。

しかして、右に座るハンサムな男は、私は全然わからなかったが、『アプレンティス：ドナルド・トランプの創り方』（24 年）（『シネマ 57』56 頁）で若き日のドナルド・トランプ役を見事に演じたハリウッド俳優セバスチャン・スタンだと知って、ビックリ！彼は『キャプテン・アメリカ』シリーズや『アベンジャーズ』シリーズの他、『アイ、トーニャ 史上最大のスキャンダル』（17 年）（『シネマ 42』56 頁）、『オデッセイ』（15 年）（『シネマ 37』34 頁）、『ブラック・スワン』（10 年）（『シネマ 26』22 頁）等にも出演しているそう。したがって、何度も観ているはずだが、残念ながら特段私の印象には残っていなかったし、『アプレンティス：ドナルド・トランプの創り方』での立派な演技にもかかわらず、私はその名前をまだ覚えていなかった。しかし、本作の演技をみて、しっかり彼の名前と顔を覚えなくちゃ！

## ■□■「美女と野獣」の出会いから物語がスタート！■□■

『美女と野獣』（14 年）（『シネマ 33』未掲載分）は有名なブロードウェイのミュージカル。17 年のアメリカ映画版（『シネマ 40』未掲載分）もあるが、同作を手本に、世の中にはさまざまな「美女と野獣」の物語が存在している。

解釈によれば本作もその一つで、本作冒頭、顔に極端な変形を持つ俳優志望の男エドワード（セバスチャン・スタン）が、隣の部屋に引っ越してきた若い女性・イングリッド（レナーテ・レインスヴェ）と出会うシークエンスが描かれる。都心部のアパートでは隣人同士の人間関係は薄いから、引っ越しにあたって菓子折を渡すことも稀なはずだが、本作（の脚本）では意外にもエドワードの部屋に入り込んだイングリッドとエドワードの間でさまざまな興味深い会話が展開していくので、それに注目！顔に極端な変形を持っていても、エドワードの男としての性的欲望や性的能力には何の障害もないはずだから、エドワードが隣人イングリッドとの出会い、そして自分の部屋の中での会話に胸がときめいたのは当然。もともと、顔に極端な変形を持つ彼が、劇作家を目指すイングリッドに惹かれながらも自分の気持ちを閉じ込めていたのも当然だが、ある日、外見を劇的に変える過激な治療を受け、念願の新しい“顔”を手に入れると・・・？

『サブスタンス』では、ある注射を打つことによって DNA が分裂し、背中を破って“より完璧な自分”が登場してくる姿に驚かされたが、そのビックリ度は本作も同じだから、それに注目！アーロン・シンバーグ監督は自分で本作の脚本を書いているが、その完成度

には驚くばかりだ。

## ■□■この変身ぶりに注目！映像技術の進歩はここまで！■□■

私は基本的に怖がりだから、大スクリーンで不気味な顔を見るのは嫌い。ミュージカル『オペラ座の怪人』に登場してくる顔にマスクをかけた怪人くらいなら何ともないが、去る5/22に観た『ガール・ウィズ・ニードル』(24年)で見た、第一次世界大戦で顔面にひどい傷を負って帰還してきた兵士(夫)を見た時の私のショックは主人公のそれ以上に大きく、正視することすら困難だった。本作冒頭にみるエドワードの顔の極端な変身ぶりはそれ以上だから、差別はよくないことだと知りつつ、堂々とそんな顔で電車に乗っている導入部のストーリーは違和感を覚えるほどだ。さらに差別批判を覚悟で言えば、ライ病(ハンセン病)患者以上に変形した顔の男エドワードと、まともな賃貸者契約を結んでくれる家主などいないはずだ。したがって、引っ越しの際に偶然であった若い女性イングリッドがエドワードの異様な顔を何ら気にせず話しかけてきたり、部屋の中まで入ってくるシークエンスは、私には違和感がある。

もっとも、それは本作の映画作り、脚本作りにおいては本質的な部分ではないので、原作者もアーロン・シンバーグ監督もあえてそれを無視しているわけだから、私もそれはあえて割り切りたい。そんな観点から面白いのは、エドワードが治療を受けている小さな病院で、「画期的な治療法が発見されたのでやってみるか？」と誘われてそれに乗り、見事に成功する短いストーリーだ。吉永小百合×浜田光夫のゴールデンコンビの代表作の1つである『愛と死をみつめて』(64年)、『シネマ57』203頁)では、治療法が見つからないためミコは無念の日を迎えたが、第97回アカデミー賞でメイクアップ&ヘアスタイリング賞にノミネートされた本作にみる、エドワードの変身ぶりは如何に？メイクアップ&ヘアスタイリング賞を受賞した(のみの受賞にとどまった)『サブスタンス』の魔法のような映像作りには感心させられたが、本作もそれと同じく素晴らしいものだから、その映像上のテクニックの素晴らしさに注目！

## ■□■美しい顔で再出発！これなら女性も！そして幸せも！■□■

『サブスタンス』では、再生医療(サブスタンス)によって、「より若く美しく、完璧なもう1人のあなたを作り出す」ことに成功したものの、そこには「1週間ごとに入れ替わらなければならない」という「絶対的なルール」があるのがミソだった。それに対して、本作でエドワードが受けた新治療はリスクもあるし、現に死ぬような苦しみを伴ったものの、いざ治療を終えてみると、家主ですら、「これがあのエドワード？」とわからないほど完璧な顔を手に入れたからすごい。

これなら、あの顔の時には夢に過ぎなかった、美しい女性と楽しい会話を交わすことはもとより、俳優としても2枚目をバッチリ！そんな期待いっぱい、エドワードの再出発が約束されたはずだ。現に、偶然街で出会ったイングリッドの後をつけてみると、そこでイングリッドは劇作家として活動していたから、たちまち2人は意気投合！そしてエドワ

ードはイングリッドの演出指導を受けることに。

そこでビックリしたのは、何とイングリッドが書いているオリジナル脚本の主役は、顔に極端な変形を持った男、そしてそのストーリーは、何とエドワードが隣人イングリッドとの間で交わしたあの時のあの会話だったから、アレレ、アレレ……。これならエドワードのセリフ回しは簡単だが、彼の感情移入は如何に……？

## ■もう一人の野獣(?) オズワルドが登場すると! ?■

世の中にエドワードのような「顔に極端な変形を持つ男」は多くないはずだが、本作後半からは、“もう1人の野獣”一つまり、かつての自分の極端に異様な顔と同じ顔の男、オズワルドと出会うから、ビックリ。そんな偶然は本来世の中にはありえないが、それが本作でアaron・シンバーグが書いた脚本の秀逸さだ。本作では、そんなエドワードとオズワルドとの出会いと、この2人に劇作家で演出家のイングリッドが絡んでくることによって、エドワードの運命は想像もつかない方向に強烈に転換していくので、それに注目!

その最大のポイントは、『サブスタンス』と同じく、エドワードの本来の居場所はどこ?ということ。つまり、エドワードにとって、顔に極端な変形を持った自分が本来なの?それとも命がけのサブスタンス(再生医療)に成功することによって手に入れた美しい顔の自分が本来なの?ということだ。もっとも、エドワードが期待したとおりの“変身”を果たし、それを彼の周囲や社会全体が受け入れてくれれば、顔に極端な変形を持ったエドワードは過去のものとして捨て去り、美しい顔のエドワードだけが存在することになるから、「どちらが本来の自分?」という問題が表面化することもありえない。ところが本作では、オズワルドの登場によって、エドワードはせっかく手に入れた美しい顔の今の自分よりも、極端に変形した顔を持った昔の自分の方が良かったのでは?という悩みに直面せざるを得なくなったわけだ。

そんなバカな!それなら、俺はなぜあんな危険いっぱいの手術を受けたの?それに成功し、美しい顔を手に入れた自分を、自分で褒めてやらなければ!当然エドワードは何度もそう思ったはずだが、イングリッドを巡る私生活でも、イングリッドが演出する芝居でもオズワルドの存在感がどんどん大きくなり、主役の座までオズワルドに奪われそうになってくると……。?

人間とは何と不条理なもの!本作中盤以降のストーリー展開をみていると、そう思わざるを得ない。そして、2人の「顔に極端な変形を持った男」を登場させて、人間の本質に迫る脚本を書き、本作を演出したアaron・シンバーグ監督の能力に、あらためて感服!

なお、本作のパンフレットには、①村山章氏(映画ライター)の『顔を捨てた男』が描く、迷える者たちへの抱擁、②稲垣貴俊氏(ライター・編集者)の「俳優セバスチャン・スタン、“顔”の分裂」、③端幸枝氏(成城大学文芸学部准教授)の「多重に演じられる顔ー『顔を捨てた男』が暴く「顔」と「視線」の問題ー」という“3本のクソ難しい”Columnがあるので、こりゃ必読!

2025(令和7)年7月23日記